

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：30116

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01960

研究課題名(和文) 潜在的地域特性の表出による観光魅力づくりに関する研究

研究課題名(英文) A Study on Creating Tourism Attraction by Discovering Potential Regional Characteristics

研究代表者

梅村 匡史(UMEMURA, Masashi)

札幌国際大学・観光学部・教授

研究者番号：30203590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、明確な観光資源を有していない地域を対象として、「その潜在的観光資源を表出させること」と「その手法を標準化すること」を目的として研究を進めた。

ソーシャルメディア上の情報の分析から、地域の既存の観光資源に対してどのようなイメージの意味形成が行われているかを明らかにすることができた。次に、各地域で使用されている小学校社会科の副読本を対象として、分析をすることにより、これまでとは異なった、地域に根差した潜在的観光資源を発掘し、観光対象となりうる事象を発見することができた。

また、テキストマイニングの分析手法を標準化し、結果を可視化することにより、活用を容易にすることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to target areas that do not have clear tourism resources, to make their potential tourism resources appear and to standardize their methods.

From the analysis of information on social media, I was able to clarify the image of existing tourist resources in the area that the visitor feels. Next, by analyzing the side reading (elementary school social studies) used in each region, we were able to discover potential tourism resources rooted in undiscovered areas. We were able to find the possibility of tourism development for that resource.

In addition, by standardizing the analysis method of text mining and visualizing the result, it was possible to make utilization easier.

研究分野：観光情報 経営情報

キーワード：観光情報 観光資源 社会学 ビックデータ まちづくり

1. 研究開始当初の背景

- (1) 平成24年度版の通信白書でも「知識情報基盤として新たな付加価値を創造するICTとビッグデータの活用」の節を設けて、様々なメディアで流布している情報の利活用の重要性を指摘している。
- (2) また、観光庁も平成26年6月に「観光ビッグデータを活用した観光振興について(中間報告)」を公表し、観光に対する意識を反映するデータ(観光関連の検索ログ、観光コンテンツへのアクセスログ、投稿コンテンツ、他者コンテンツへの評価など)を活用し、「地域における観光客へのサービス向上と、事業者や自治体等による客観的事実に基づく科学的経営や施策の効果測定等の実現」「観光行動の解明に基づいた観光振興策の考案と影響予測(リピーター確保のための魅力的な周遊メニューの提示等)」に反映すべきであると提言している。

しかしながら、このような観光領域を対象とした観光ビッグデータ、特にテキスト分析による研究は先行研究が少なく、梅村らがソーシャルメディア上に流布している個人投稿された大量のテキストデータにより、来訪者が個々の観光地に抱いているイメージやニーズを意味ネットワークにより類型化することにより、提供者と来訪者間の合致点と相違点を明らかにした研究は、先駆的なものであった。

本研究ではこれまでの成果に基づき、観光振興によりまちづくりを推進しようとしている多くの地域において、地域の有している潜在的資源を表出させ、観光振興に寄与することを目的としている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、前述のように顕著な観光資源を有していない地域において、観光振興を推進していくための潜在的な地域資源を発見し観光振興に寄与することが最も大きな目的である。この目的を実現するため以下の3つの下位目標を設定するとともに、今後の研究に向けて4つ目の副次的目標を勘案するものである。

- (1) 全国の主要な観光地の地域の意味ネットワーク特性を明らかにし、その特性を類型化すること。
- (2) 明確な観光資源を提示できていない地域において意味ネットワークから地域の特性を具現化し、来訪者のニーズを満足できるような潜在的な観光対象の魅力を見出し、演出性を高めたものとして提供するためのアクションプログラムの策定を行うこと。
- (3) 本研究での知見を、観光を施策としてまちづくりを推進している多くの地域で活用するためのテキストデータの活用方法を明らかにし、広く地域再生に寄与することの三点を主目的とすること。

- (4) さらに、観光に関する規範となるコーパスの作成を想定することも副次的目的として遂行すること。

なお、本研究の実施体制は、前回同様、観光の研究者(研究代表者)と言語の研究者(研究分担者)による共同研究である。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために設けた3つの下位目標と1つの付加目標を達成するため、以下の8つのタスクフォースと目標を設定し研究を進めた。

- (1) 「インターネットにみる地域特性表現の分析と観光資源の評価に関する基礎的研究」(基盤研究C)の成果からの知見の整理と課題の精査

これまでの共同研究から得られた知見の整理及び再検証と残された課題を精査する。

- (2) 文献・報告書等による国内の観光、観光対象に関する現状の再確認と観光振興の課題の精査

観光・地域振興・まちづくり等をキーワードに研究論文・報告書・書籍等からテキスト分析の先行研究をレビューし、現状を再確認するとともに、解決すべき課題の確認を行う。

- (3) 国内の主要な観光地の選定、ネット上の地域情報の収集と意味ネットワークの作成と類型化

国内の主要な観光地を30程度選定し、インターネット上から地域情報を収集し、テキストマイニングの手法を活用して、意味ネットワークを作成し、その特性に応じて類型化を行う。その際、梅村らの研究で類型化した北海道内の観光地との類似点と相違点に注目して検討を行う。

- (4) 明確な観光資源を提示できていない地域の選定と現地調査による情報収集

初年度の対象地域として、北海道の漁村地域である乙部町、農村地域である秩父別町、山村地域である下川町を想定している。各町とも知名度の高い観光対象を有していない地域である。これらの地域で、関係者に対する聞き取り調査を実施するとともにイベント等で来訪者に対するフリーアンサーの聞き取りを実施してサンプルの収集を行い、テキスト化を図る。初年度後半から翌年度にかけて同様の現地調査を国内に対象地域を広げ実施する。地域の選定にあたっては、道内の調査地域との関連性に考慮する。

- (5) 上記地域の意味ネットワークの作成と類型化

上記(4)で得られた地域テキスト情報をもとに、テキストマイニングの手法を用い、意味ネットワークを作成し、上記(3)での類型化への適用を探る。その際、意味ネットワークを構成している場所や施設・アクティビティ等の地域の観光対象に成りうる語句の連鎖について考慮する。

- (6) 意味ネットワークに基づく地域特性の具現化と演出性を付加した観光プログラ

ムの策定と試行

上記(5)で得られた意味ネットワークをもとに、(3)の道内の主要観光地の意味ネットワークとの比較検討により、地域特性の象徴的対象を具現化し、演出性を高めたアクションプログラムの策定を行い、地域の協力が得られたところから試行を行う。

上記の(4)から(6)までのプロセスを道内の3地域と国内のいくつかの地域で繰り返し、アクションプログラムの実行性を高める。

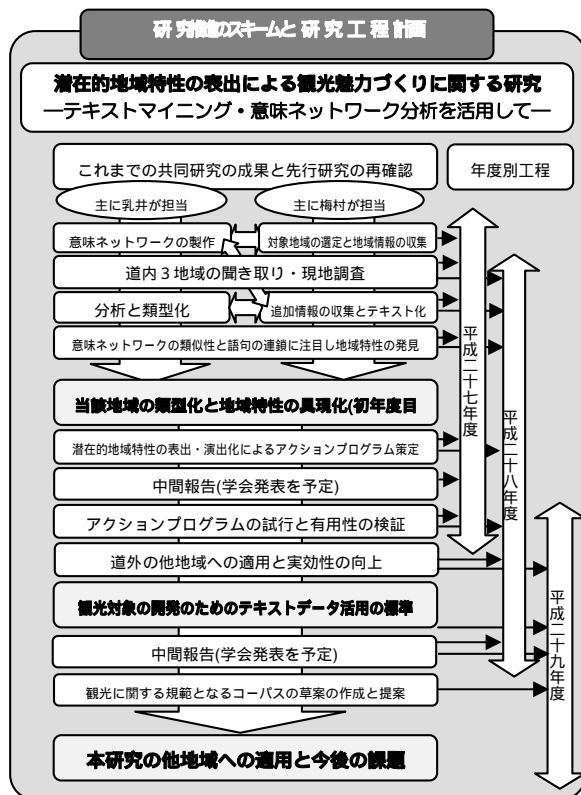
(7) 観光振興に大量のテキストデータを活用するための方法の標準化

アクションプログラムの策定と試行は、観光をまちづくりの主要施策の一環を担うものではあるが、明確な観光資源を提示できていない地域で、地域のポテンシャルを表出させ、商品化するため、テキストマイニングの活用方法とアクションプログラム策定の方法について標準化をおこない、いずれの地域でも活用できる方法論を提示する。

(8) 本研究からの知見と今後の課題

本研究から得られた知見を整理し、観光振興を推進するための方策を検討するとともに、地域の活性化を推進していく手法についても検討を加えていく。また、本研究から得られた課題についても精査して今後の研究課題として整理する。あわせて、観光に関する規範となるコーパスの作成を想定し、研究を進める。

以上のことを図式化すると図表1のようになる。



図表1 研究工程計画

4. 研究成果

初年度は、今までの研究の成果を踏まえ、

国内の代表的な観光地と道内3地域の大量のテキストデータをテキストマイニングの手法で意味ネットワークを作成、類型化し、両者を比較検討することにより類似点と相違点を明らかにすることを、主課題として実施した。下川町、秩父別町の両町を訪れ、必要なテキストデータ入手し電子情報化した。また、乙部町に関しては従来の研究の際に収集した情報を電子情報化した。今後の研究に当たり、秩父別町では副町長、下川町では町長と面談し、今後の研究についての協力依頼と段取りを協議した。乙部町については全研究に引き続き、K町議を窓口として協力体制の構築を行っているが、役所関係者との関係の構築が課題になっていた。

調査対象地域の、形態素解析については終了し、若干の特徴を見出すことはできているが、各地域の類似点と相違点を明確にするには至っておらず、意味ネットワークからも明確な違いを見いだせないでいる。今回使用したデータが、ネット上のブログ、行政から提供された観光関連情報を主たるデータ源としたため、大きな差異が生じなかったと考えられるため、現地で直接観光者からデータを収集するなどデータの収集方法を再検討する必要がある。図表2は各データで使用した分析対象の語句数の一覧である。

	秩父別町	下川町	乙部町
創生総合計画	2361 語	5130 語	6810 語
ブログ	75614 語	84191 語	70344 語
4トラベル旅行記	16158 語	6005 語	16386 語
4トラベル口コミ	3983 語	4385 語	3137 語
トリップアドバイザー	2011 語	3389 語	2644 語

図表2 対象とした語句数

以上が初年度の成果である。

初年度の課題であった、該当地域との関係の構築に関しては、乙部町を除きおおむね順調に進んだ。2年目は秩父別町、下川町、乙部町に関する、ソーシャルメディア上に流布されている情報を収集し、テキストマイニングの手法を用い分析し、異なる2つの手法を用いて、地域の観光資源に対してどのようなイメージの意味形成が行われているかを明らかにした。農業、林業、漁業を主産業とする地域が対象であったが、その違いを超えて、秩父別町では、「バラ」「ブロッコリー」が、下川町では、「ジャンプ」「キャンドル」、乙部町では、「政府軍」「幕府軍」といった、地域の地域特性を特定することができ、いずれの手法においても3つの町の違いについて明らかにすることができた。

また、この結果に基づき、アクションプログラムの策定を行い、当該地域と実施に向けて関係者と検討を行ったが、成果として形になるのは最終年度以降の課題となった。

さらに、現在、上記3町村の周辺市町村、地域の中核となる市町村の情報の収集と分析を並行して行っており、農業、漁業、林業といった同様な産業構造を持つ地域との違

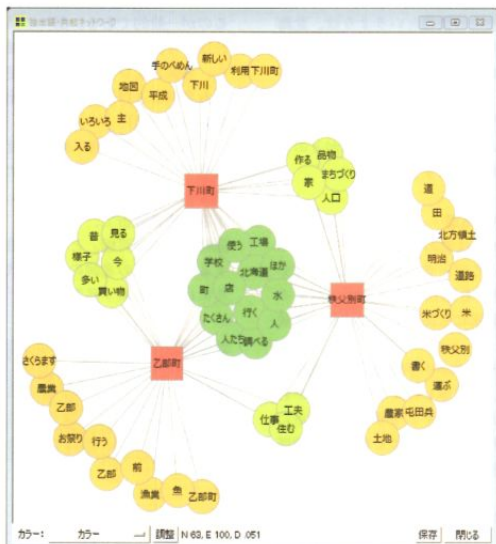
いのある、各市町村での資源の独自性を明らかにする。さらに高名な観光資源を有していない地域で、潜在的な地域の特色を表出し、来訪者のイメージのネットワーク形成(ニーズ)に応じた観光対象を開発・提供するために、周辺地域が持つ観光対象を明確にしていくとともに、当該地域の独自の観光資源の発見・表出と観光商品の開発を検討し、観光をまちづくりの施策の一つとし、観光振興を推進している多くの地域で、本研究の成果を活用するための方策を明らかにする手順について研究を進めた。図表3は、研究の過程で表出してきた語句の一部である。

パラ、温泉、写真、海、ドロヤナギ、政府軍、江差、札幌、木、旭川、花、イベント、ローズガーデン、プロッコリー、留萌、香り、鐘、宿、留萌本線、函館、花火大会、山、森、岬、名寄、自然、雪ホテル、湯、朱文別駅、富良野、万里の長城、ソフトクリーム、景色、風目、建物、深川、鮭、松前、桜、戦い、滝川、釣り、幕府軍、祭り、ワイン、ウニ、公園、キャンドル、うどん、緑、歴史、露天風呂、丘、木古内、ジャンプ、北竜町、ひまわり、メロン、美瑛、展望台、五味温泉、ラベンダー、二股口、増毛(以上65語)

図表3 抽出した語句

ここまでの成果は、札幌国際大学紀要(2017)に『ネット上の投稿に見る潜在的な地域資源の発見手法に関する考察』として発表した。

最終年度の目標は、これまでのプロセスを国内のいくつかの地域に適用し、アクションプログラムの策定を行うこと。アクションプログラムを、実施体制の整った地域から試行すること。大量の地域情報を収集・加工・蓄積し、テキストマイニングの様々な手法を用い分析し、アクションプログラムを策定する過程の標準化を行い、多くの地域で活用できるように汎用性を高めること。を目標としていた。



図表4 3町との見出しと共起ネットワーク図

このうち、アクションプログラムの策定までは到達できたが、実施については、現地との実行体制が整わず実行するには至らなかったが、最終年度に実施の方向で現地と継続的に協議した。現地の情報の収集に当たっては、各地域で使用されている小学校社会科の地域を知るための副読本を対象として、分析をすることにより、これまでとは異なった、地域に根差した潜在的観光資源の発掘に寄与できる観光対象となりうる事象を発見することが出来た。

図表4は、観光対象となる語句を、各町をインデックスとして可視化した、共起ネットワーク図である。

また、図表5は他の地域では出現しないが、当該の地域のみで高順位で出現する語句の一覧である。

	秩父別(48語)	乙部(33語)	下川(54語)
1-50位	秩父別町、深川、農協、秩父		一の橋、名寄、名寄川
51-100位	記録、戦争、雨竜川、記念式典、秩父別町、分別、お金、その後、むかし、トマト、トラック、絵地図、郷土館、工事、札幌、中学校、年、冷害	姫川、放流、アスパラガス、栄浜、漁、豊浜、栽培、町内、国道、三ツ谷、鮭	苫小牧港、消防しょ、じょう水場、気がつく、空港、次郎左衛門、分かる、機械、公民館、数、先生、それぞれ、下川神社、消防しせつ、肉、流れる、引く、下、形、時間、西、美瑛町、木材、用水路
101-150位	ジュース、安心、引く、改良、開基、学習、出荷、石狩川、全園、全体、足りる、第一、努める、発表、米作り、方位、問題、落成、領土、わたしたちの暮らし、スポーツ、ロシア、開始、活力、樺太、記念塔	せい品、乙部小学校、栽培、森、鳥山、米作り、汚泥、夏、牛、漁師、教える、元和、向かう、事故、神社、人々、地いき、函館市、八助いじいさん、表、1日、L	せつ、たて物、サンル、トラック、パンケ川、ポンプ、韓国、人々、木工場、量、きょう、くみ上げる、ふるさと交流館、パルプ、観光、決まる、結ぶ、口、工事、広げる、行事、仕組み、紙、事故、受ける、住宅、初めて

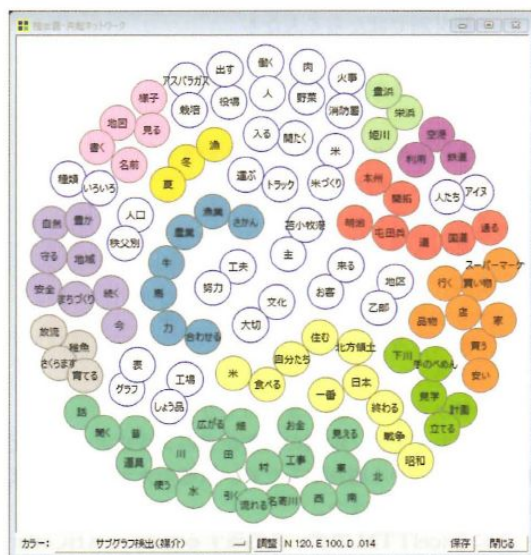
図表5 各町での頻出150語のみ出現する語句

また、北海道新聞の記事データベースを活用し、当該地域及び周辺の地域に関して、分析を行い比較検討を試みたが、顕著な成果を掲げるには至っていない。

当該の地域同様、SNS やブログ、副読本を分析し、比較検討を行うことにより、その差異性を明らかにすることができる。と考える。

最終年度より、新たに研究協力者として加わった伊藤寛教授の様々な助言や語彙からの分析により、観光の領域でテキストマイニングを推進するために不可避である、観光のテキストコーパス(観光に関する言語資料の集合体)を作成するための草案の作成に着手し一定の方向性を見出したことも成果の一つである。

本研究では、3つの町を対象として比較することによる分析を進めてきたが、図表6のような共起ネットワークを描画することにより、各地域とそこに関連する語句を可視化することができる。



図表6 描画数100の共起ネットワーク図

ここまでの成果は、札幌国際大学紀要(2018)に『地域副読本に見る潜在的地域特性の可視化手法に関する考察』として発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

梅村匡史、「潜在的地域特性の発見手法に関する考察」、日本観光学会第110回全国大会研究発表論旨集、査読無、2016年、54-55

梅村匡史、伊藤寛、「ネット上の投稿に見る潜在的地域特性の発見手法に関する考察」、札幌国際大学紀要、査読無、2017年、48号、131-160

梅村匡史、伊藤寛、「地域副読本に見る潜在的地域特性の可視化手法に関する考察」、札幌国際大学紀要、査読無、2018年、49号、141-183

〔学会発表〕(計 1件)

梅村匡史、潜在的地域特性の発見手法に関する考察、日本観光学会、2016年

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅村 匡史 (UMEMURA Masashi)
札幌国際大学・観光学部・教授
研究者番号: 30203590

(2) 研究分担者

乳井 克憲 (CHICHI Katsunori)
札幌国際大学・スポーツ人間学部・教授
研究者番号: 40150833

(3) 研究協力者

伊藤寛 (ITOU Hioshi)
札幌国際大学・人文学部・教授